

めだかふぁみりい 山下佳子さん

聞き手 協同総研 菊地 謙

『ぼくらはこの街で暮らしたい』(ぶどう社)という本がある。埼玉県川口市に暮らす山下家の2番目の男の子に、障害があることがわかったところから物語は始まる。母親である山下佳子さんは、その子純平さんがいかにきょうだいや他の子と一緒に地域の中で生きていくかを考え、周りの人たちと「めだかふぁみりい」の活動をスタートする。他の子と一緒に遊び、一緒に学校に通い、一緒に生活する中で子供たちは成長し、養護学校卒業後はみんなでクッキー作りの作業所を立ち上げていく。そんな活動が川口の人たちにも理解され、駅前商店街の真ん中へのクッキー屋の出店が実現する。

あるきっかけでこの本を読んだことで、障害者も普通の人と一緒に暮らせる街のイメージが少し湧いてきた。めだかふぁみりいをお訪ねして代表の山下さんにお話を伺った。(編集部)

親としての思いから

めだかふぁみりいのこれまでの経緯を。

まず、私の2番目の子供に障害があったわけですね。それがわかったのが大体1歳半の頃でした。そこから「どうやって育てていったらいいか?」「どうすれば普通の子を育てるような育て方ができるんだろう」ということを考えました。やっぱり、障害がある

新 協同人に聞く

ということがわかると、療育相談所みたいなところや治療教室といったステップがあり、それから養護学校なり特殊学級へ行って作業所なり施設なりという、障害者としての育ち方と生きていく道筋を示されるんです。

1歳くらいまでは全く普通の子だと信じきっていたわけで、あきらめきれないですよ。私にとっては同じ命なわけで「上の子や隣近所の子とどこが違うのか」と。「特別な場所に行っていて、特別な手立てをしてあげないとこの人は自立して生きていけませんよ」と専門家は言うけれど「そうではないんじゃないか」「最初から分けられること自体が、違うんじゃないか」と感じて。やっぱり上の子が隣近所で遊ぶように遊ばせてやりたいし、「この子はどうも障害があるらしいけど、でもそのことを知った上でも友達になって欲しい」と。

ただ、その思いというのは本当にごく個人的な思いに過ぎないわけだから、周りの人たち、特に専門家には通用しなかったんですね。でも、どうしてもやっぱり普通に育てたいから「足りない部分を補ってあげれば一緒に過ごせるんじゃないか」ということで、たまたま地域にスポーツセンターがあったので、そこで一緒に遊ばないかしらと、クラスの友達とかきょうだいの友達という人たちが集まってつくったのが「めだかふぁみりい」の始まりなんです。

その当時は、そのような活動はあまり一般的でなかったんですか?

なかったですよ。ただ、その頃は一方で養護学校の全入という運動があって、どんなに障害が重い人でも教育を受ける権利があるということで、それまで就学猶予で在宅だった人たちも、全員が養護学校に行けるようになったんです。それが進むというのは一方で

は教育権が獲得できていいことには違いないんだけど、今度は「障害がある子はみんなそっち(養護学校)へ行きなさい」になっちゃって、今まで混ざり合ってた街の中で一緒に育っていたものも、逆に言うと排除されていってしまった。他方でそれと同じ頃に、ある人は「養護学校はアカンねん」という提示をしたり「障害児を普通学級へ全国連絡会」などができたりして、その選択権は障害のある本人とその家族にあるのではないかと、ということです。いろいろな運動があったんですね。

でも、私たちはそういう運動としてやったわけではなくて、本当に親としての思いから出発したんです。「障害者である前に一人の人間であるわけだから、一人の子供として育ててやりたい」と。でも、それには大変な育ちにくさがあるからそこをどう補ってやれば育ちやすいのかということにいろいろ工夫をしていったんです。その工夫の最初がスポーツクラブ¹であり、おもちゃの図書館²であり、生活学校³や青年のひろば⁴をやったりカルチャースクール⁵をやったりして、養護学校の高等部を卒業する時にクッキーの作業所をつくったということなんですね。子供のその時期その時期の必要に合わせて、活動を積み重ねてきた結果広がってきた、というそんなスタイルなんです。そのことに共感してくれた人がこの街には結構いて、それで応援してくれたんで何とかやってきたんです。

「この子もいてこの街」

活動を始めて、障害のあるお子さんを持ったご家族がまわりに沢山増えてきた、ということなのでしょうか？

そんなに増えなかったんですよ。私は自分

の子供の手の届く、生活範囲の中での呼びかけしかしてこなかったから。自然な手の届く人間関係ということを見ると、小さな地域の中で障害を持った人というのは、むしろ少ないわけで、それがまた自然な形だと思ってきました。普通学級に入ったから、障害者同士のつながりというのは、最初の頃はほとんどなかったですね。

もちろん息子の言葉の問題とか、文字や数といったいろんな獲得させてあげたいというようなことも、普通学級に行っているから私が自分で教えなければならぬし、そういう教室に通って専門家の力は借りました。けれ



山下 佳子 (やました よしこ)

東京都出身

明治学院大学社会学部社会福祉学科中退

家族：6人 趣味：映画鑑賞、旅行、山歩き

1983年 めだかスポーツクラブ開始

めだかふぁみりい設立

1985年 めだかおもちゃ図書館開設

1993年 地域ケア施設すいーつばだけ開設

2001年 NPO法人めだかふぁみりい設立

2002年 (仮称)社会福祉法人めだかすとりのいむ
設立申請中

NPO法人めだかふぁみりい 代表

地域ケア施設すいーつばだけ 所長

埼玉県知的障害者相談員、川口市保健福祉審議会

委員、川口市ボランティア推進リーダー

どもそういうところに通って熱心になればなるほど、特に母親はそうすることが自分に課せられた義務と感ずるようになり、落とし穴となるように感じていました。普通の子でも小さい時から塾通いとかお稽古事とかをしていくと、結果として子供の頃に、十分に遊んだり隣近所の子供たちとのふれあいとかいうことを無くしちゃうんじゃないか、それと同じだと思ったんですね。

いわゆる「療育」はやらなければならないことだけれど、一方でやっぱり街の中で育っていくこと、街の中で一緒に生きていくことをすごく大事にしたかったんですね。とにかく「この子もいてこの街」「この子もいてこの学校」というのをわかって欲しかった。

その思いというのは、まわりに受け止めてもらえたのでしょうか？

受け止めてくれる人もいれば、違うと感じた人もいるかもしれない。そのことに終わりが無いじゃないですか。だから、ずっと続けていく私たちの生き方みたいなものに共感して「応援したい」というふうに言ってくれた人たちが沢山いたということですね。

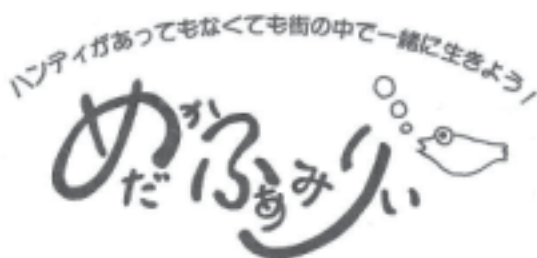
やっぱり障害者観というのにはいくつかあると思うんです。「障害のある人の障害の部分に焦点をあてて発達を促す」という発達論的な観方と、「障害のある人本人をとりまく関係の中でその子供と、どう向きあったりしていくか」という関係論的な捉え方があるとしたら、前者からは「専門家による指導」がイメージされるし、後者はどちらかということ「まわりの方がサポートしつつ、つき合う」自然なつながりがイメージされてきます。私はこのことをある本で読んだ時、「目からウ

ロコ」が落ちました。

「青年のひろば」活動は、お子さんたちが成長していく中で、本人が一番やりたいことを、いわゆる福祉とはまた違った普通の友達つきあいのような形でやっていますよね。今もこれは続いているんですか？

10年ちょっと続いたんですが、子供同士だった時代っていうのは、お互いにとっても自然な人間関係が作れていて、特にうちの場合、上の息子と2番目の息子が年子だったので、一緒に育って行って、その仲間たちが青年のひろばをとっても活発にやってくれてたんです。ところが就職して仲間が遠くに離れたり、学生さんなどがみんなずっと年下になってしまったりして、だんだん難しくなってきました。そういう中で、本人たちが成長してきて、今まではボランティアがどこかに連れて行ってくれるという形が多かったのが、本人たちの方からいろいろ希望が出てきて、でも本人たちだけでは出来ないの、「本人活動」と「青年のひろば」を一緒にやっていくような形にやり直しましょう、という時期に今来ているんですね。

本当に10年ちょっとよく続いたなあと思っています。なによりも、この10年ちょっとの間に、この青年の活動があったというのが、あの人たちの人生にとってとても大きなことだったと思います。特にめだかふぁみりいの人たちはこの地域の学校に行っている人たちが多く、その生徒たちがとてもよく顔を覚えてくれてね。だから例えばガソリンを





入れに行っ
て息子が
乗っていれ
ば、スタンド
の人が声を
かけてくれ
たりして。だ
からといっ
て私たちが
普通に自然
に結べるよ
うな人間関
係というの

はなかなか結びにくいですけどね。それでも、そういう場や機会があれば、また戻ってきてくれる人もいるかも知れないので、「青年のひろば」を開いて続けているっていう感じですかね。

クッキー屋さんを開く

お子さんがだんだん成長してきて、その必然的な先として働く場所を作ろうということで、1993年に「すいーつばたけ」というクッキー屋さんを始められる訳ですが、これは最初から作業所ということでスタートしているんですか？

そうなんですよね。最初立ち上げる時には、それこそ事業体として有限会社でやった方が障害者多数雇用の制度などを利用できるし、そういったアドバイスをしてくださった方もいたんです。でも、私たちが抱えている問題は「働くこと」だけではないですよ。この人たちの生涯にわたる支えとか支援ということを考えると、やっぱり福祉の世界だろうと考えたんですよ。クッキーを買ってくださる人の層というのも、その当時は一般の人

よりは圧倒的にこういうことに関心のある人の方が多かったので、単なる事業体というやっていけるとも思わなかったんです。

3年目から作業所として補助金がついて、職員の方のお給料などが出せるようになったとのことですが、例えばオープンなどの設備を準備するお金はどうしたんですか？

それは共同募金の助成金とか、それこそいろいろな財団、ヤマト福祉財団もそうですし、大和証券とか生命保険会社とかありとあらゆるところにあたって、毎年毎年冷蔵庫を増やしたりオープンを増やしたりしました。一番最初はオープンとミキサーだけは買いましたが、それ以外はみんなもらいものでした。

5、6人の作業所からスタートして、売り上げは？

最初の1年間は、子供たちがまだ高3で、準備期間と考えていたんですが、準備期間のうちに結構口コミで忙しくなってしまう。私たちが作ってそれをまた定価で買って配って広めていったんですが、だんだん口コミで広がり始め、そこまでいくとめだかふぁみりいのそれまでの10年間の活動のバックという人間関係の層の厚さというのが、すごく大きかったですね。いきなり作業所だけを始めるためにやったわけではなかったから。「この子たちをこの街で正當に人として育てたい、生きていって欲しい」という思い、そのところに共感してくれた人たちが「立ち上がったんだね、頑張ってる」という感じで、クッキーそのものもおいしかったから広げてくれたんですよ。そしたら、もうとてとても専従職員を置かなければやりきれないほどの仕事量になってきたので、職員を採用し

新 協同人に聞く

て。

主な「売り先」は？

やっぱり、一番割合が高いのは注文販売なんですよ。「通信」を出しているんですが、この中に必ず中元・お歳暮・バレンタイン・ホワイトデーなどの注文書をダイレクトメールで入れるんですよ。その他には、ライオンズクラブやロータリークラブといったところでイベントで使ってくれたりとか。今も電話がきたのは、新しい保育園が開設されるので、

そのパーティーで使ってくれるというんですね。やっぱり口コミが大きいですね。

それはやはりおいしいからだと思うんですが、確かプロの方が指導してくれたとか？

そうなんです。商店街のパン屋さんとケーキ屋さんなんですが、それは、やっぱりものすごいものをもらったと思っていますね。しかもクッキーの味という一番の企業秘密を惜しげもなく教えてくださったんですね。

「商店街っていったいどうあるべきなのか」

商店街の中にお店が出せるようになったのは、すごいことだと思うんですが、やっぱり川口銀座通り商店街には特徴があるんでしょうか？

本(『ぼくらはこの街で暮らしたい』)にも書いてありますが、設計事務所をやっている建築家の森さんという方がいて、その人が私



すいーつばたけで

たちのこの20年の流れの中では、3本の指に入るキーマンだったんですね。その方が街づくりという視点をきちんと持って、それと私たちの夢を結び付けてくれたんだと思うんです。

川口銀座商店街は、以前は本当にいわゆる「昔の商店街」でしたが、駅前に「そごう」が出店してくるというのがあって「このままでは寂れてしまう」という危機感から、モール化してもっとお客さんが集まる商店街にすることになったんです。でも自分たちだけでは出来ないから行政を巻き込んで、ということを商店街の側の市民運動としてやったわけです。その設計をやった方が森さんです。そこで一杯議論をしていくうちに「じゃあ商店街っていったいどうあるべきなのか」というのが出てきて、この時点で既に商売をするだけでなくやっぱり「街づくり」という視点が商店街の人たちにあったんでですね。

「自分たちの利益だけを追求するのではなくて、お客さんにとって来やすい商店街だったり、やさしい商店街だったりすれば、お客

さんは自然に集まってくる訳だから、結果として繁盛していくんだ」という考え方で、今はもう「バリアフリー」なんて誰でも知っている言葉だけれども、約15年ほど前の時点で、それを実現していたんですね。それはもうすごい先見性を持ったもので、どこの店でも乳母車や車椅子がそのまま入れるようにしてあるんです。

今、「シャッター通り」などというような商店街の衰退が大きな問題になっていますが、15年も前にモール化して現在まで非常ににぎやかな商店街であるというのは、すごいことだな、と思います。

商店街の人たちはものすごく勉強しているらしいんですが、商売をやっていくのに「誰にでもやさしい」「誰もが来てくれる」「会話がある」ということを考えていくと「必ず福祉とつながる」と言うんですね。そのことが一応、形(ハード)としては出来ただけでも「何か足りない」と思っていた時に、森さんが私たちと出会って、私た

ちの夢を語ったら「それはもう絶対自分の出番だと直感した」とおっしゃっていました。「あの時あれだけ議論してこういう商店街をつくったけど、これでよかったのか？」とすぐもやもやしていたそうです。めだかふぁみりいと出会って、とにかく障害のある子もない子もワイワイやっていて、結構小さい子たちが自分たちより大きい障害のある人の手を自然に引っ張って一緒に何かやったりとか、そういうことに「少年のようなすがすがしい感動を覚えた」と言っていましたね。

それでその子たちが「クッキー屋をつくってもっと街に出たい、できればメインストリートで」と言ったら、「それはすごいロマンのある話だ」ということで、即、何とかしようと動いてくださったんです。それはもう私たちの思いと、街の人たちの思いとが重なって、両方の夢が実現できたということなんですね。そこで、単なる空き店舗対策じゃない商店街の振興組合の事業としてやろうというふうに言ってくれたんです。

人に頼って街の中に資源を見つけたら

お店では全部で何人働いているんですか？

ここ(作業所=クッキー工場)で働いている19人が交代でお店に行っているんですね。それと職員が1人ずつ行ってそのローテーションなんですけど。

最低賃金200円/時と本にはありましたが...

そんなに言えるほどのものじゃないんですけど、それさえ満たない作業所がほとんどなので、そのことが何か悲しいですよ。私た

新 協同人に聞く



川口銀座通り商店街



イトーヨーカ堂でのクッキー販売

ちだっていつまでも200円でいい訳はなくて、年齢と共に上がっていかねばならないものが上げられない。それはもう「作業所の中での自主生産という仕事では限界なのかな」という気が最近しています。年間2400万位売り上げていて、それはそれで大変なこと、すごいことだと思うんですが。

お店までは皆さん一人で通うんですか？

ええ。出来るようになったんですよ、それが。いろいろハプニングがありながら。バスを終点まで乗ってしまったたり、乗る路線を間違えたり。今だにバス停までは送って行って、その路線のバスに乗せてあげる人もいます。ほんのちょっとのその人への支えがあれば、街で生活できるんです。でも、そのほんのちょっとがないから、全部施設で生活することになっちゃうんですよ。障害がある人は普通の人に比べて確かに足りないところがあるんだけどその「どこが足りないか」の「どこ」の部分誰がどう補えばいいのか、それさえあれば普通に生きていけるんですよ。

作業所としては、毎年新しい人は入ってくるんですか。

ずっと入ってきていたんですが、2年前か

らもう定員の19人一杯になってしまって、今はお断りしている状態です。

最初から働いている人は何年位ですか？

もう9年になりますね。

もう、ベテランですね。やっぱり、働いて来るなかで変わってきたところはあるんでしょうか？

たしかにあるんだけど、変わってきたと同時に慣れてきてしまって、甘えの構造になっているのもあるんですね。最初は夢を持って立ち上げてきて、評判や沢山の注文も頂いてそれは否定するものではないんだけど、メンバーの人たちのことを考えると、19人がずっとここで同じようにここで歳をとっていくのは、ちょっと違うんじゃないかと思いはじめています。

もっと出来るのに、ここにいて認められて優しくしてもらえるものだから、遅刻して平気だとか、いろいろな問題があるんですよ。ここでも利用者同士の間関係とか問題行動とかもあるんだけど、そのことを施設の中だけでどんなに話し合ってもケーススタディーみたいなことをやったり、専門家の知恵を借りて医療相談をやってみたりしても、ここだけでは解決しないと私は思っています。

A君という人がいて、彼はものすごく仕事が出来た人なんだけど、仕事が出来たために他の人の仕事のやり方が許せないんです。それでいつも大きな声を出して「あの人はこうだ」とか言って自分がパニックになっちゃうんですよ。それでいきなり他の人がやってるのを取ってやり直したりするんです。そうすると、された方はまた混乱する、ということで、彼は一人で仕事をするようになったんですね。何をやらせてもよく出来るんですよ。だけど「本当にもったいないな」と思うんですね。「この人の力がここではそ

の何割も生かせない」とずっと思っていて、たまたま、私が20年以上、生活クラブ生協の組合員だったということもあって、週1回の仕分けの仕事に出させてもらったんです。そしたらそれがすごく良くて。

私は息子を地域社会の中で普通に育てようと思って、彼の成長に合わせて必要に応じて夢を持ってクッキー屋をつくったんですが、そこから先というのは、だんだん人が増えてきて、この中で抱え込んできたなということをA君に気づかされました。今「もう一回外に出そう」と思っているんですね。「何やってきたんだろう」としてその時本当に思いました(笑)。

やっぱり社会に出るっていうか、もっともっと街の人に頼って街の中に資源を見つけたらいいんじゃないか、と私は今すごくそっちに舵を切りたいなと思っていますね。

ここで、訓練して外に出て、また戻ってということが出来ればいいですね。それには、受け入れる側の地域の力も必要だと思いますが。商店街などはどうなのでしょう？

例えば商店街のマクドナルド⁹は今年、障害者を雇用したんです。イトーヨーカドー⁹などはちゃんと障害者雇用のノルマがあって、障害者雇用率をクリアしているかどうかでもチェックされる。だから、そういうことに、私たちがもっとアプローチしてこなかったということかも知れません。小さな商店なんかでは難しいけれども、大きな会社なら可能かなとも思うんで、これからは少しずつやっていきたいですね。「交流」というのは出来るんですよ、でも、そこと混ざり合っ一緒にやることというのは、なかなか難しいですからね。

MICS事業(地域生活支援事業)¹⁰というのを現在行っておられますが、「障害のある



「すいーつばたけ」のクッキー

人が街に慣れ、街が障害者に慣れ」ようなという考え方に、共感します。

本に書かれた当時以降、埼玉県的生活サポート事業というのが始まったので、現在はその委託を受けてMICS事業を展開しています。だからいくらか楽になりました。今は5、60人の支援が来ています。

いわゆるグループホームのようなもの目指しているんですか？

それは、もうちょっと先の目標です。グループホームとか生活ホームというのも、もっともっと本人たちのところに立って考えないと、入所施設に入れるのと少しも変わらないじゃないかを感じるんですね。どんなことでも、本人たちの納得や承諾なしには、してはいけませんよ。だから、どうしたら本人たちの納得や承諾を作り出せるんだろうか、ということです。それには、やはり経験の積み重ね以外にないと思っています。「将来大人になったら、そういう風に暮らしていくんだ」というイメージを持っていければ、いいと思うんです。それで「誰と誰と暮らしたい」とか、「この人に一緒に世話をしたい」とかというのが出来ていけば、スムーズに移行できると思います。親御さんが世話を出来なくなってから「あなたは今日からここへ行くのよ」というのでは、入所施設

新 協同人に聞く

と少しも変わらないんじゃないかな、と。

当事者の運動に終わらせない

昨年NPO法人を取得されて、今度は社会福祉法人もお取りになるということですが。

社会福祉法人の方は、県に協議書をあげてすでに一度協議があって、今、国の協議を待っているところです。内示がおりるのが6月くらいといわれています。

社会福祉法人に関して、一番安心な部分というのは、私たちがいなくなっても法人は残る、ということですね。だから、そういう意味では、どうしても必要だと思って申請しましたけれど、障害のある人を「固める」という意味では、そうせざるを得ないわけです。作業所として30人定員になるわけだから、今以上に受け入れなければならない。だから、やっぱり外へ出そうという視点がなければ「今までやってきたことが何だったんだろう」ということになると思うんですよね。

そうではないものを持っていたいがために、わざわざNPO法人を別につくったんです。誰もがめだかふぁみりいが大好きで、会員さんやその周辺の人たちも応援したいと思うんですが、ところがそのめだかふぁみりいの中心になって運営していく戦力が、だんだん厳しくなっている。私も(作業所とめだかふぁみりいの活動の)両方掛け持ちで、これからは社会福祉法人の方の仕事をしなければならなくなるからなおさら厳しいので、今、めだかふぁみりいの方の専従職員を何とか採用したいと思っているんだけど、それなら今日お話を聞いた労働者協同組合にした方がいいかなって(笑)。

新 協同人に聞く

法律がうまく通ったら、ぜひ(笑)。でも、法人格の問題というのは難しいですよな。

「なぜ、社会福祉法人を取るのに、NPOなどの法人まで取るのか」といったら、障害者の運動というのはどうしても家族や当事者の問題で終わってしまうじゃないですか。そうではなくて、当事者もいるけども普通の人も加わって一緒に運営していけるような、そういうものにこだわって大事にしていきたいものだから。親御さんも「親だから」というのではなく、一人のボランティアとして楽しみながら参加していってもらえたらいいかなと。

社会福祉法人の認可がおりたら、どんな作業所になるんですか？

そこは、パンが主でその他にクッキーと木工です。それと、園芸もやります。新しい作業所のできる安行は植木の街ですからね。植木屋さんの下働きなんかもやれたらと。お店ももちろん併設します。施設が街に向かって開かれた場である、というのは当然のことなんだけれど、でも施設は施設ですからね。そこ自身では多分何にもやらない所の方が外には出られるんだと思います。忙しくてその中で完結してしまうような施設はね、今までがそうだったんだけど、どうしても内に向けてしまうんで。それはそれで評価できることなんですけど、やっぱり「外へ出て行きたいなあ」と今はすごくそう思っています。だから申請した協議書の計画には、そういうようなことを書いたんですね。

障害のある人が外に出てこない、とやっぱり外の人たちは触れる機会がないし、直接一緒に働いてみることで理解が深まるんだと思います。今日は、本当にどうもありがとうございました。

- 1 1983年、地元川口市安行スポーツセンターで、6家族で「めだかスポーツクラブ」を開始。内容は準備体操 サーキットトレーニング リトミック 自由遊び 「さよならあんころもち」など。
- 2 1985年、週1回、公民館を利用して障害を持つ子がおもちゃを通じて遊びを広げ、ボランティアと出会う場として開始する。障害がある子もいない子も一緒に遊び、気に入ったおもちゃを借りることも出来る。
- 3 1987年夏、小学校高学年になった子供たちのために、生活する上で必要なことを経験できる機会として開始。料理、裁縫、工作などを毎月1回楽しんだ。この活動は子供たちが学校を卒業するまで続き、一旦中断した後、1995年より「生活学校」として再開。
- 4 子供たちが高校に入った頃、そのきょうだいたちと一緒に始める。カラオケ、ボーリング、遊園地、買物、旅行、バンド活動等々、それぞれの個性に応じた活動を月1回行ってきた。現在の状況は、インタビュー中の山下さんの話を参照。
- 5 地域の障害者に向けて開かれた学習の場。水泳教室、木工教室、エアロビクス教室、ハンドベルクラブ、絵手紙教室等を行ってきた。
- 6 「めだかふぁみりい通信」毎月18回、1・3・5・6・7・9の日発行。4/9発行分で通巻3777号!!。
- 7 JR川口駅東口川口そごうの裏手、六間通りから八間通りの間を結ぶ。
川口銀座商店街振興組合のホームページ
<http://www.saitama-j.or.jp/~k-ginza/>
- 8 1999年9月23日付毎日新聞によれば、日本マクドナルドでは知的障害者120人を含む140人の障害者が店舗等で働いている。99年度は40人を採用している。
- 9 朝日新聞文化財団の「企業の社会貢献度」賞では、イトーヨーカ堂が99年、2000年と障害者雇用部門でトップとなっている。その前3年間(96,97,98)は2位。川口店では店頭ですいーつばたけのクッキー販売をさせてもらっている。
- 10 「地域生活支援事業」M...Member of Medakafamily (「めだかふぁみりい」の障害のある人たち), I...Independence (自立), C...Community (地域社会), S...Support (支援)。「めだかふぁみりいの

家」を拠点とした、宿泊体験、レスパイトサービス、ガイドヘルプ等を行っている。



めだかふぁみりい

〒334-0056 埼玉県川口市峯 1010

048-298-2260

E-mail medaka@medakafamily.jp

手づくりクッキーすいーつばたけ店舗

〒332-0017 埼玉県川口市栄町 3-11-21

048-255-0408

めだかふぁみりいの本



ぼくらはこの街で暮らしたい

ハンディがあってもなくても一緒に！

めだかふぁみりい著
ぶどう社 2000年10月発行
定価（本体1600円＋税）

目次

プロローグ

この街が私たちをはぐぐんてくれた

- 1章 地域でふつうの子育てをしたい！
- 2章 みんなで楽しいこといっぱいしよう！
- 3章 手作りクッキー工場は大忙し
- 4章 お店にはぎやか商店街の中
- 5章 誰もが地域の暮らしの支え手に

エピローグ

将来へ、みんなの夢はふくらむ
あとがき

お問い合わせ・お求めは

ぶどう社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 福生ビル5F

TEL 03-3234-1450 FAX 03-3234-1925

e-mail home@budousha.co.jp <http://www.budousha.co.jp/>